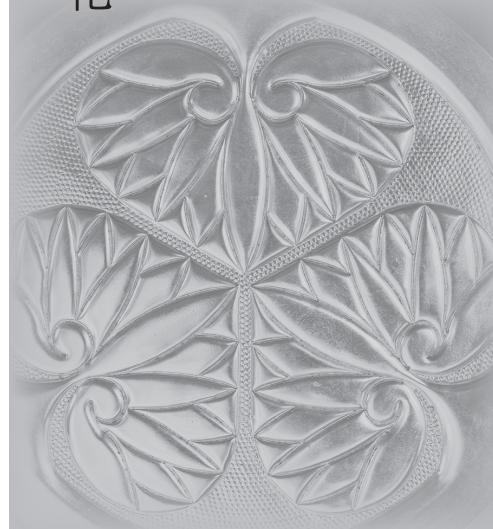


経営と健康

徳川家康、三度死す

第一回

講師 一龍斎貞花



と、援軍わずか三千。

眼を血走らせ、爪をかんでいた家康。

「ナニツ、信玄はこの浜松城を無視して通り過ぎていくとは許せん。このまま居すくんでおれば、弓矢の恥辱はもとより臆病者よと、世にも人にもあざけられるは必定。ならば、息の続く限りに戦つてみるまでのこと。いかに信玄勇猛といえど鬼神ではあるまい。」

明朝出陣じゃー!

「無謀にございます。今は我慢のしどころ、籠城しておれば通り過ぎて行きます」

「エエイ、其方たちはいつから腰抜けになったのじゃ。信玄が恐ろしい奴はここから落ちていけ」

敵に無視されておめおめ引下がつてなるものか。

十二月二十二日、未だ明けやらぬ空のもと手勢を率いて屏が崖にと陣を敷く。パパンパン

「オウ家康め出て来おつたか」

浜名湖の岸にある堀江城を落せば、浜松と本国岡崎を遮断することが出来ると、城外へ誘い出すための行動。

孫子、呉子、六韜、三略を会得している信玄の策略に陥る家康。

陣鐘太鼓ほら貝の音高らかに、武田自慢の騎馬武者が怒涛の如く押し寄せ

る。
これを見るや織田の援軍、佐久間信盛に続いて滝川一益の部隊も「ソレツ」とばかりに逃げ出した。本多平八郎を先頭に勇敢に戦うも、

弓矢の聖とうたわれる信玄とあつて、

いかに戦上手の家康といえど、甲州勢に押し立てられ散々の有様。

たまらず家康は、二十騎の旗本に守られ馬をおおつて逃げんとするも、その行手行手に立ちふさがる甲州勢に、味方の面々次々と討ち倒され、

「おのれ!」馬上に突つ立った家康、目を吊り上げ、

「最早これまで、敵陣に斬り込み、わしは死ぬぞ」

「何卒、お留まりを」

「エエイ、うぬ等は腰が抜けたか、三河の者ども、我とともに死ぬつ」

わめき立てるや馬の首を返して津波の如く押し寄せる武田勢目掛けて突き入らんとした。

この時、浜松の城を守っておりまして夏目次郎左衛門吉信、三方ヶ原苦戦を聞くや三十五騎を率いて敵中に踊り入

四度の難、六度の難、その都度「どうする」が大河ドラマだが、自ら敵陣

へ乗り込むとか、腹を切ると言いながら家来に止められ天下を掌握したといわれるが、これだけ多くの危機を全部乗り越えられたとは信じがたい。どこかで命を落としたに違いない。主を失いながらどう対処したか、参考になるかも。愚作にお付き合下さい。

三方ヶ原の大難戦、一度目の死

元龜三年（一五七二）十月十四日、甲陽の太守武田大僧正信玄、三万五千の大軍を率いて都へ馳せのぼらんものと、甲府八ツ花形を出陣。

すわや一大事と家康は、同盟を結んでいる織田信長に援軍を求めると、

「信玄と戦つて勝てる見込みはない」

らんとする家康の馬の轡に取りすがり、「何卒この場はお立ち退き下さるよう、殿の代りは某が」

家康の乗った馬の頭を浜松に向け、槍の柄で馬の尻をビシッとなぐりつけたから、馬はヒーンと一声、浜松指して一目散。

につこり笑った次郎左衛門、家康の兜をかぶり、「ヤアヤア、我こそは徳川三河守家康なり」

名乗りをあげて家康の身代りとなり武田の大軍の中に踊り入り壮烈な討死。次郎左衛門が命を捨てて敵を防いでいる間に、家康馬の平首にしがみつきのようよう囲みを抜けてホッと一息つくところへ、甲州勢に味方して後陣に控えておりました北条の一隊。

「ヤアヤア、それへ引き揚ぐるは徳川三河守と見受けたり。某は小田原にその人ありと知られたる清水太郎左衛門政次なり！」

かつて北条が今川と不可侵条約締結の時、今川家を訪れた清水が当時今川の家来であった松平元康と会っていたの

で早くも家康と見抜き、たちまち家康の旗本を次々と鉄棒にて打ち倒す。家康必死に逃げんとしたが、太郎左衛門が家康目掛けて打ち下ろした十八貫目の鉄棒を諸に喰らって非業の最期。パンパン

この時旗本の一人が、手にせる槍で清水の乗った馬の太っ腹に力まかせに突き立てれば馬は棹立ち、太郎左衛門鞍にたまらずどうと落馬。

この時とばかり生き残った本多正信、「我に続け」

馬を飛ばして敵をふりきり、追い駆けてくる敵なしと見るや馬足を止め、

「夏目が身代わりになって討たれたため、今清水のために討たれたのが本物と武田方は知るまい。影武者を同行させておいたのがなにより。よいか其方が只今より影武者でなく家康公じゃ。部下への下知はわしにする。そちはうなづけばよい、わかったな」

生き残ったのは家康の近習ばかり、「よいか、決して殿が討たれたこと口外してはならぬ。殿は健在であるとな。もし他言せし者は斬り捨てる。主君が討たれたと判ればたちどころに攻められ徳川の家は滅亡する。徳川家あつてこ

そ我等の勤めは可能。そこをよく考える。殿はわしが必ず盛り立てるから心配致すな」

「ハッ、かしこまりました」

「よし、急ぎ城へ逃げ込むのじゃ」
ようようことで浜松の城へ逃げ帰るや、城門を固めております老臣鳥居元忠に、

「殿のお言いつけじゃ。城門ごとごとく開き大かがり火を焚け、橋を落すなよ」

「城門を開きましたは、一気に敵に攻め込まれます」

「殿のお考えあつてのこと、お言いつけじゃ」

城内に入るや、
「湯漬けを持って、殿がお召し上りになるぞ。殿、湯漬けを召し上りさぞお疲れでございます。お休みください」

「本多殿」

「これ、其方は家康公じゃ、家来に殿と言つてはいかん。その場で横になり鼻をかいて寝る。落ち着いているところをみせるのじゃ」

「ま、正信、湯漬けを食べる前に下帯を換えさせてくれ」
「いかがなされました」

「実は、馬の上で大を漏らして逃げてきたのだ」

「仕様のない殿でござるな、急いで湯殿で下帯をお換え下され。……まあよいわ。窮地に陥つた時には爪をかむくせがおありだ。よいか殿のくせを身につけておけ。ヤレヤレ骨の折れることだわい」

身代わりとなる影武者には、風貌だけでなく、口調から、くせ、身のこなしなどきちんと覚えさせ、ほんの一部の者を除き味方の者にも影武者と思わせなかつた。家の存続を考えてのこと。

徳川家には、本多正信のいう謀り事に長けた家来がいた。正信は影武者2号3号を作り抜きなく、くせなど教え込みイザに備えたのでございます。信玄の影武者は有名。信長には五人の影武者がいたともいわれます。

一度目の死から、まだ二度目、三度目の死がござります。ご期待下され。

